在韓米軍の戦略的柔軟性

目指すは対中国の日韓比「戦略的トライアングル」

樋　口　譲　次

〇米韓、同盟の「近代化」で在韓米軍の「戦略的柔軟性」を重視

米国と韓国は、米韓相互防衛条約に基づく軍事同盟の「近代化」を進めようとしている。その一環として、中国、ロシア、北朝鮮による脅威が急速に変化・拡大し３カ国が同調・連携を深める中、在韓米軍（USFK）の「戦略的柔軟性」、すなわち、同軍の任務を中国が関与する事態を含むよう拡大する取組みについて検討している。

米韓同盟は、「いずれかの締約国に対する太平洋地域における武力攻撃が自国の平和及び安全を危うくするものであることを認め、自国の憲法上の手続に従って共通の危険に対処するように行動する」（第３条）としている。

基本的に北朝鮮の脅威に備えた集団防衛体制であるが、それを中国の脅威による事態への対処に拡大しようとするものであり、米韓同盟は大きな転換点を迎えている。

この動きに沿うように、今年１月に発表されたドナルド・トランプ米政権の「国家防衛戦略（NDS)」は、韓国が自国の防衛に「主たる責任」を負い、「米国の重要だが限定的な支援」を受けることとした。また、トランプ政権の同盟政策は「一方的な依存」よりも「責任の共有」を優先していることを強調し同盟国の国防費増加を求めている。

これを受け、韓国の李在明大統領は、国防費を 2025 年の GDP 比約 2.3%から可能な限り速やかに 3.5%に増額することを約束し、2026 年の国防予算を 7.5%増額した。自らの力で北朝鮮の挑発に備える構えを明確にした格好だ。

また、同大統領は、トランプ大統領が支持を表明している原子力潜水艦の韓国導入計画を進めていると報じられている。

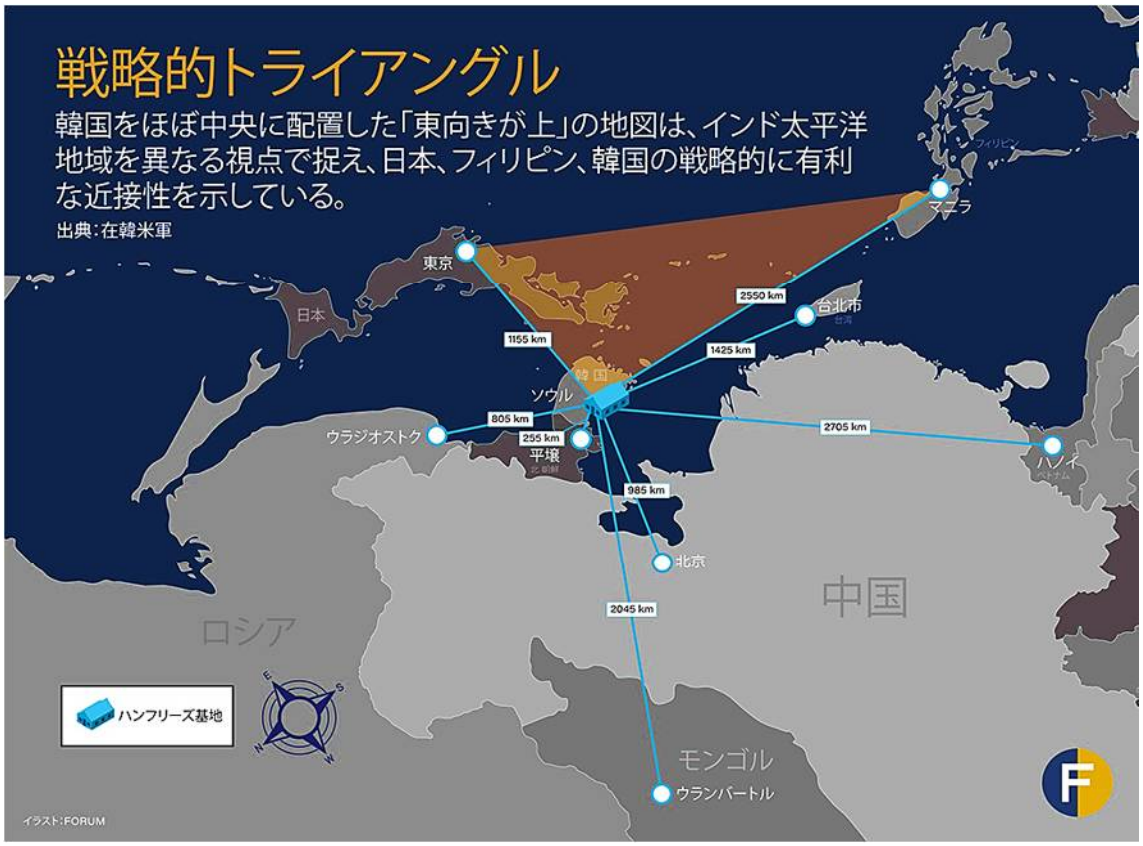
韓国は、ロシアの技術支援（小型原子炉やタービンなどの動力機関）を得て建造中と見られる北朝鮮の原子力潜水艦ばかりでなく、米韓両国間では、場合によって中国に対抗するために、原子力潜水艦を開発運用することを含めている可能性がある。

そして、この動きと軌を一にして、在韓米軍の「戦略的柔軟性」は、同司令官（国連軍司令官、米韓連合軍司令官及び米陸軍第８軍司令官を兼務）であるザビエル・ブランソン米陸軍大将によって、中国を睨みつつ、インド太平洋における日本、韓国、フィリピンの３カ国をもって形成される新たな「戦略的三角形（トライアングル)」として発展的に提案されている。

〇在韓米軍司令官、日韓比の新たな「戦略的トライアングル（三角形）」を提案

ブランソン司令官の提案は、前述の通り、米国と中国の大国間競争が激化する情勢を踏まえ、米国がインド太平洋の同盟国に集団防衛の強化を求め、在韓米軍の戦略的柔軟性を重視する中でなされたものだ。

ブランソン氏は、下記の地図を示し、インド太平洋を通常の北向きの地図ではなく「東向き」の地図で見ると、この地域の戦略的視点は「劇的に変化する」とし、米国とその同盟国にとって見落とされていた戦略的優位性が明らかになる可能性があると指摘している。



＜出典＞在韓米軍提供の地図を基にインド太平洋防衛フォーラムが翻訳補正

ブランソン司令官が指摘する「戦略的トライアングル（三角形）」の戦略的優位性を要約すると次の通りである。

●米軍は潜在的な紛争地帯に到達するために、広大な距離を越えて戦力を投射しなければならない。しかし、在韓米軍（約 2.9 万人、在日米軍：約 6 万人）は、危機や有事の際に米国が突破する必要のある紛争境界内に既に展開している。 この戦略的配置によって、距

離を障害から利点へと転換し敵にコストを課すことができる。
●韓国は、地域構造における戦略的な奥行きと中心的な位置付けを提供し、ロシアと中国の両軍に対するコスト付与能力という利点も備えている。日本は高度な技術力を提供し、太平洋航路沿いの重要な海上チョークポイントを掌握している。フィリピンは南方へのアクセスポイントを提供し、太平洋とインド洋を結ぶ重要な海上航路を掌握している。
　この３カ国が協力し、三角形の戦域内で適切に部隊を配置して統合ネットワークを構築すれば相互補完的な能力を提供することができる。
●朝鮮半島は、北のロシアからの脅威に対処すると同時に、朝鮮半島と中国の間の海域における中国の活動に対して西側からの影響力を発揮できる位置にある。この戦略的位置から、朝鮮半島がロシア艦隊の動きを制限するとともに、中国の北部戦区軍だけでなく北方艦隊にもコストを課すことができる。朝鮮半島は、両隣の海域における敵対的な作戦に影響を与え、重要な戦略的潜在力を示す役割を浮き彫りにする。
●米第８軍司令部があるキャンプ・ハンフリーズ（平沢基地、在韓国京畿道平沢市）は、潜在的な脅威（中国）に極めて近い。また、首都ソウル南方のオサン（烏山）空軍基地は、複雑な戦力投射を必要とする遠方の基地ではなく、これらの近接性は中国国内あるいは周辺地域に直ちに影響を及ぼすことができる。

　このように、ブランソン司令官は朝鮮半島を米国、中国、ロシア、北朝鮮の相対的位置関係における中心に位置づけ、その地理的優位性と脅威対象国への近接性並びに日韓比の相互補完的な能力を活用した戦略的三角形の協力を促進すれば、中国に対する戦略的優位性を獲得できると主張しているのだ。

〇米国を中心とした日韓比「戦略的トライアングル」＋台湾の追及を！
　今年１月、韓国を訪問したエルブリッジ・コルビー米国防次官（政策担当）は、米国のインド太平洋戦略は第一列島線（FIC）における拒否的抑止に焦点を当てているとし、日本、フィリピン、朝鮮半島における強靭な部隊の育成の必要性について言及した。その目標は、中国に対し FIC 全体にわたる侵略は魅力的な選択肢ではないことを納得させることだと述べ、在韓米軍（USFK）の任務を中国が関与する事態を含むように拡大する取り組みの一環として、中国への対抗を強調した。

　しかし、在韓米軍の戦略的柔軟性に関する韓国の反応は複雑である。
　少なくとも過去 20 年間、韓国にとって中国は最大の貿易相手国であり、外国直接投資（FDI）の最大の投資先の一つでもある。
　こうした経済的理由や隣国同士、歴史的親和性などの理由から、韓国の指導者たちは概して中国との建設的な関係構築を目指している。
　しかし、2017 年の米軍の最新鋭迎撃システム「THAAD（終末高高度防衛ミサイル）」

の韓国配備に対し中国の報復が長期化したように、時として、中国政府は韓国政府の政策選択に対し韓国企業に経済制裁を課すことがある。

韓国の李在明大統領は、韓国と中国は「避けられない絆」を共有しているものの、韓国は「米国の対中政策の基本姿勢に反する行動や決定をすることはできない」が、「韓国は中台紛争への関与は回避すべきだ」とも述べており、政治・外交的に難しい舵取りを迫られている。

在韓米軍は、主として北朝鮮の地上侵攻への備えを重視する観点から、ロシアの地上侵攻に備える在欧米軍と同じように「空地戦（Air-Land Battle）」の態勢を採っている。

その戦力は、主に地上作戦に最適化された 1 個師団（第 2 歩兵師団）と 1 個空軍（第 7 空軍）で構成されている。一方、インド太平洋戦域では、その特性上「空海戦（Air-Sea Battle）」が重視されており、黄海から東シナ海、南シナ海の戦いに不可欠な海上戦力（海兵隊を含む）を欠いている。そのため、在韓米軍の戦力構成の見直しや削減が行われる可能性がある。

現在、韓国軍は戦時において、国連軍及び米韓連合軍司令官等を兼務する在韓米軍司令官が率いる二国間司令部の下に置かれている。それを韓国軍が主導し米軍が支援する新たな共同防衛体制へ移行するため、米韓両国は 2006 年以来、戦時作戦統制権（OPCON）を韓国軍司令官と米国軍副司令官が率いる二国間司令部に移管する準備を進めている。李大統領が退任予定の 2030 年までに移管を完了させる計画のようであるが、その実現には韓国軍の飛躍的能力向上が求められる。

近年、日米韓の安全保障協力の強化と日米比の戦略的トライアングルの推進が併行して進められている。

これを、米国を中心とした日米比の戦略的トライアングルに拡大・発展させるのはより望ましい方向であり、そのためには、前掲の諸課題の解決とともに、特段の外交的努力が求められる。

願わくは、さらに高い外交的ハードルを乗り越え、日米比の戦略的トライアングルに最大の当事者である台湾を加えることができれば、中国に対する戦略的優位性はさらに高まろう。

その結果、中国の攻撃を物理的に阻止・無力化する能力を示し、「攻撃しても目的を達成できない／失敗する」と思わせることで、攻撃そのものを思い止まらせる拒否的抑止を達成することができるのではないだろうか。